言語学の中で最も重要な原則の１つは意味が任意であるということだ。これは名前と名前が表すモノとの間にある関係が任意であるということをはっきり述べている。言い換えれば、名前と名前が表すモノとの間には必然的な関係は全くないということだ。例えば、日本語を話す人にとって、腕の先に続いているからだの部分は「手」と呼ばれている。しかしながら、日本以外ではその体の部分を「手」という名前で呼ばなければならないという必要性はまったくない。英語を理解し話す人にとって、「手」には“HAND”という異なった名前がある。あるモノとその名前はお互いに密接に結びついているので、そのモノが別の名前で呼ばれるのを受け入れることが難しい。それでもやはり、これは真実のように思われる。『ロミオとジュリエット』のジュリエットが仮面舞踏会でロミオと恋に落ちた後に、バルコニーで「名前に何があるというの？バラは何と呼ばれようと、その甘い香りに変わりはないわ。」と言ったように。私たちが名前とモノの間にあるこのような任意的な性質のことがもっとよくわかるのは、私たちが実際に名付け親となり赤ちゃんに名前を付ける時である。あなたが思い浮かべる名前がその赤ちゃんに一生つきまとうことを想像してみなさい。

そうは言うものの、あるモノとその名前はまだお互いに密接に結び付いているのだ。そして、私たちはその名前なしには何も思い浮かべることはできないのだ。ある大学の講師が講義でアンケートを行い学生達に質問した。「もしあなた達が違う名前を付けられていたとしたら自分は違う人間だったかもしれないと思うか。」と。すると、学生達の半分は「はい」と答えたのだ。ある学生は次のように書いた。「私は名前がつよしなので強い人間にならざるを得なかった。」と。

名前について忘れてはならないもう１つのことは、主な意味に加えてあることばが思い出させる意味合い、観念、あるいは印象である。あなたがあるモノを自分の言語で呼び、他の人達が同じモノを彼らの言語で呼ぶとき、この２つの名前が２つの言語において違う意味合いを持つかもしれない。たとえ２つの名前の主要な意味が同じであったとしても。私はかつて「雑草世代」という日本語の表現を英語に翻訳しようとしたことがある。「雑草世代」という日本語が意味するのは、ほとんどの人が苦難や攻撃をものともせず、精神的に逞しい世代のことだ。イギリス人の友達との会話の中で、私はこの言葉を“weed generation”と訳したところ、彼が笑い出したのだ。何が間違っていたのだろうか。「ええと」と彼は説明してくれた。「君が“weed generation”と言うと、その言葉は弱々しい世代の人達のように聞こえてしまうよ。」この誤訳は、「雑草」と“weed”どちらも主として同じモノ（望まれない場所に生える野生の植物のようなもの）を意味するとしても、人間の性格の特徴を述べることに用いられるとき、「雑草」と“weed”は正反対の意見合いを持つという事実から来ているのである。「雑草」タイプの人はたくましいが、一方で“weed”タイプの人は弱々しいのだ。

名前というモノは、このように興味深いものである。名前は名前が表すモノのことを言うだけでなく、他にとても多くの概念を私達の頭に呼び起こすのだ。意味が持つ任意性の原則があるにもかかわらず、モノとその名前を切り離すことはとても難しいのである。